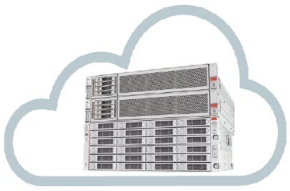
ORACLE

Base Database Cloud@Customer X11



場所を問わず顧客の拠点でプライベート AI、データ、アプリケーションに対応するシンプルで統合されたハイブリッド・クラウド

Oracle Base Database Cloud@Customer

Oracle Base Database Cloud@Customer は、Oracle AI Database Enterprise Edition および Standard Edition に、データベース・ライフサイクル管理のための強力なクラウド自動化を提供します。Oracle Base Database Cloud@Customer は、世界でもっとも普及している、汎用性の高いデータベース・テクノロジーである Oracle AI Database を、オラクルが管理するデータ・インフラストラクチャと組み合わせることにより、クラウド・デプロイメント・モデルの簡便性、セキュリティ、および経済性をお客様の拠点で実現します。Oracle AI Database のあらゆる機能とオプションがサービスとして提供される一方、オンラインでの柔軟なコンピューティング拡張により、従量課金制のデータベース・ライセンスを利用したコストの削減が可能です。

Base Database サービスは、Oracle エンジニアド・システムの Data Infrastructure Cloud@Customer 上で稼働します。パブリック・クラウドと同じサービスと自動化のエクスペリエンスをお客様の拠点で提供すると同時に、両方の環境間で互換性を保証します。お客様は、データベース・インスタンス、データベース・ホーム、およびグリッド・インフラストラクチャにフル・アクセスでき、データベース仮想マシン（VM）への root アクセス権限に加え、プロビジョニングするデータベースに対する完全な DBA 権限を有します。そして、必要に応じてデータベース VM を構成して、バックアップ・エージェントや監視エージェントなどの追加のソフトウェアをサポートできる一方、別のアプリケーション VM でアプリケーションをプロビジョニングすることができます。Oracle AI Database の 100%の互換性により、汎用ハードウエアへの既存のデータベース・デプロイメントを、リスクと労力を最小限に抑えながら Base Database Cloud@Customer へ移行することができます。

Base Database Cloud@Customer は、世界各地のオラクルのお客様によって実証されているベスト・プラクティスに従ってデプロイされます。Oracle Cloud Operations によってインフラストラクチャを管理することで、運用コストとリスクが軽減され、IT 部門はより価値の高いビジネス・イニシアチブに集中できます。お客様が、クラウドの自動化を使用してオンプレミス・デプロイメントと同様の性能を提供するデータベース環境を管理することで、アプリケーションの変更なしでオンプレミスからクラウドへの移行が簡素化されます。

Data Infrastructure Cloud@Customer

高性能 Data Infrastructure Cloud@Customer のハードウェアは、2 台の Oracle X11 サーバーと 1 台のストレージ・シェルフを収容する 8U のラックマウント型システムです。各サーバーは使用可能な 60 コアの x86 プロセッサ・コア、660 GB の使用可能なメモリを搭載しており、2 つのデュアル・ポートの 25 ギガビット・イーサネット（GbE）SFP28 または 2 つのクアッド・ポートの 10GBase-T PCIe ネットワーク・アダプタのいずれかの選択肢で外部ネットワーク接続に対応します。2 台のサーバーはクラスタ通信用の 25 GbE インターコネクトで相互接続され、直接接続された高性能な SAS ストレージが共有されます。ベース・ストレージ・シェルフの一部には、三重ミラー化されたデータ・ストレージ用に 6 台の 7.68 TB のソリッド・ステート・ドライブ（SSD）が収容され、使用可能なストレージ容量は合計 11.6 TB になります。ストレージ・シェルフは、最大 24 台の 7.68 TB の SSD まで拡張でき、使用可能なストレージ容量は合計 47.2 TB になります。

「*Oracle Base Database Cloud@Customer* は、プロビジョニング、スケーリング、そして継続的な管理をクラウドによって自動化するため、タイムリーで信頼できる郵便配達の厳しい要件をサポートしてくれます。特に、負荷テストでのオールフラッシュ・パフォーマンスに加え、必要な場所でどこでも利用できる効率的でコスト意識の高いクラウド・サービスが印象的でした。」

Swiss Post AG
PO Database Oracle
Bernhard Weber 氏

「新しい *Oracle Base Database Cloud@Customer* のエクスペリエンスは完璧でした。プロビジョニングがスムーズで、パフォーマンスは期待以上でした。お客様がこの新製品を活用されることを楽しみにしています。」

Viscosity
CEO, Founder
Charles Kim 氏

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

ORACLE

強力なクラウド自動化によるライフサイクル管理

お客様は Data Infrastructure Cloud@Customer システムをプロビジョニングし、Oracle Linux を実行するデータベース VM クラスタを作成します。VM クラスタは、複数のコンテナ・データベースをホストし、各コンテナ・データベース内に 1 つ以上のプラガブル・データベースをデプロイできます。ライフサイクル操作（プロビジョニング、スケーリング、更新、バックアップなど）は、Web ブラウザの UI、または Cloud Control Plane から利用できる REST API 駆動の自動化を使用して実行されます。オペレーティング・システムおよびデータベースの更新は、お客様が設定したスケジュールに基づいて適用されます。基盤インフラストラクチャ（サーバー、ストレージ、ネットワーク、ハイパーバイザ、システム・ソフトウェアなど）は、オラクルによってデプロイ、監視、管理が行われます。インフラストラクチャのメンテナンス期間は、Oracle Cloud Operations によってお客様に提供され、お客様のビジネス活動により適した時期にメンテナンスを遅らせることができます。

お客様は、ビジネスの状況の変化に応じて、VM に割り当てられている ECPU、メモリ、ファイル・システム・ストレージ、データベース・ストレージ容量を含む、VM クラスタのリソースを簡単にスケーリングできます。想定されるもっとも高いピーク・ワークロードに備えてサイズを決定する高コストな手法は、オンプレミス・システムで求められることがよくありますが、柔軟なスケーリングによりこれを回避できます。動的スケーリングを活かすユースケースとしては、日、週、月、四半期、または年のうちワークロードが増大する期間が変化する例が挙げられます。データベースは完全にオンラインのまま、ECPU の動的スケーリングを行うことが可能です。

お客様は、Zero Data Loss Recovery Appliance や NFS ターゲットなどのバックアップ先にデータベースを自動的にバックアップできます。Cloud Control Plane を使用して Data Guard を構成し、関連するライフサイクル操作を行って、ミッション・クリティカルなデータベースを計画外の障害から保護したり、計画的メンテナンス作業に伴う停止時間を短縮したりできます。

お客様は、現在サポートされているすべての Oracle AI Database バージョンをデプロイできます。Oracle データベースの最新のサポート状況については、『Review MyOracle Support Note PNEWS1360: Release Schedule of Current Database Releases』を参照してください。

データベース、アプリケーション、AI 向けのハイブリッド・クラウド

複数のデータベース VM クラスタおよびアプリケーション VM を Data Infrastructure Cloud@Customer 上でプロビジョニングして、ワークロードの統合を増やし、インフラストラクチャの使用効率を最大化できます。各 VM は、専用のアクセス制御、ネットワーク構成、カスタマイズ可能なコンピューティング、メモリ、およびストレージ・リソースを備えた独立したオペレーティング環境を提供します。データベース VM クラスタは Oracle Linux 8 をサポートしており、高可用性を実現するために 2 台のサーバーにわたってデプロイすることも、リソースをワークロード要件に合わせるために 1 台のサーバーにデプロイすることもできます。アプリケーション VM は Oracle Linux 8 および 9 に対応しており、ホスト・サーバーに障害が生じた場合は利用可能なサーバー上で再起動されます。すべての VM は、Oracle Cloud コントロール・プレーンを通じてプロビジョニングと管理が行われます。

おもな利点

- 顧客の拠点でのシンプルで信頼できる手頃な価格のデータベース・クラウド
- 中断を最小限に抑えた、クラウドへの極めて迅速な移行
- オンプレミスのデータ・レジデンシーはコンプライアンス要件およびセキュリティ要件に対応
- オンプレミス・データベースおよびパブリック・クラウド・データベースとの互換性
- オラクルが管理するインフラストラクチャによる労力とリスクの低減
- クラウド UI および REST API によるプロビジョニングとライフサイクル管理の簡素化
- CapEx から OpEx におよぶクラウドの経済性
- 使用状況に沿ったコストにより総所有コストを低減する従量制
- データベースとアプリケーションの統合による価値の倍増

柔軟なコンピューティング

- 第 5 世代の AMD EPYC™ プロセッサ
- VM で使用可能な 120 のサーバー・コア
- 使用可能な 1,320 GB の DDR5 DRAM

スケーラブルなストレージ

- 使用可能な最大 47.2 TB のストレージ容量（高冗長性、非圧縮）

高速ネットワーク

- サーバー間の 25 Gbps の相互接続
- 10 Gbps または 25 Gbps（クライアント接続とバックアップ接続）

関連製品

- Oracle Database 26ai および 19c
- Oracle Real Application Clusters
- Oracle Active Data Guard
- Oracle Multitenant
- Oracle Database In-Memory
- Oracle Partitioning
- Oracle Advanced Compression

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

お客様と独立系ソフトウェア・ベンダー（ISV）は、可用性を最大化しながら、完全なデータベース環境とアプリケーション環境を同じシステム上で統合できます。Data Infrastructure Cloud@Customer 上のアプリケーション VM と Oracle Private AI Services Container および Oracle AI Database Private Agent Factory を組み合わせることで、お客様はファイアウォールの内側で完全に自社拠点でプライベート・データを使用して、エンドツーエンドのエージェント型 AI ワークロードをデプロイできます。

- Oracle Hybrid Columnar Compression
- Oracle Advanced Security
- Oracle Real Application Testing
- Oracle Advanced Analytics
- Oracle Enterprise Manager

データ・レジデンシーとコンプライアンスの要件

データ・レジデンシーの法律、業界規制、企業方針、ネットワーク接続、セキュリティ要件、そして緊密に統合されたオンプレミス・インフラストラクチャからデータベースを移動することが困難な状態。多くの場合、これらがパブリック・クラウド・データベース・サービスの採用を妨げています。これらの考慮事項は、一元化されたデータセンター内の中核となるデータベース環境だけでなく、部門、支店、リモート・サイトにも当てはまります。Base Database Cloud@Customer を使用すると、組織はインフラストラクチャにかかる導入コストを抑えながら、顧客が管理するデータベース・サービスをあらゆる場所で実行できます。同時に、データの完全な物理的制御を維持しつつ、クラウドの自動化やオラクルが管理するインフラストラクチャを利用して運用を簡素化できます。

Oracle Maximum Availability Architecture（MAA）

Base Database Cloud@Customer は、完全に冗長化されたハードウェアとソフトウェアにより、高レベルの可用性を提供するように設計されています。これはシングルインスタンス・データベースまたはクラスタ化されたデータベースの両方に最適化されており、オラクルの高可用性（HA）とディザスタ・リカバリ（DR）テクノロジーを使用するための、階層化されたベストプラクティスと設計手法である Oracle Maximum Availability Architecture（MAA）を念頭において設計されています。上記のテクノロジーには、Real Application Clusters（Oracle RAC）、ASM、RMAN、Flashback、Active Data Guard、Application Continuity が含まれており、クリティカル・アプリケーションにおけるビジネス継続性の要件を満たすよう可用性が最適化されます。Oracle データベースのデプロイは MAA ベスト・プラクティスを使用しており、お客様はクラウド自動化を使用して、Oracle RAC と Active Data Guard といった主要な HA 機能と DR 機能をすぐに活用できるようになります。

Cloud Control Plane

Cloud Control Plane は、Oracle Cloud Infrastructure（OCI）の Oracle Public Cloud で実行される高度なソフトウェア・スイートです。Base Database Cloud@Customer の管理者は、セキュアなリンクを通じ、Web ブラウザ、コマンドライン・インタフェース（CLI）、REST API、または言語固有の SDK を使用して Cloud Control Plane に接続できます。

Cloud Control Plane には高度な ID 管理システムが含まれ、これによって複数の部門またはグループが Oracle Cloud Infrastructure テナンシーを共有できます。コンパートメントによってリソース間のアクセス制御が可能になり、リソースへのアクセスを単一のテナンシー内で編成、制御する効率的なメカニズムが提供されます。

Cloud Control Plane は、システム上で実行されるインフラストラクチャおよび VM のデプロイに使用します。さらに、プロビジョニング、パッチ適用、バックアップ、Data Guard の構成など、データベース・ライフサイクル操作の実行にも使用します。ポリシーは、職務分離のため単一データベース内で権限をきめ細かく設定して付与するのに使用できます。Cloud Control Plane のもう一つ重要な機能として、お客様の使用状況を追跡し、使用分のみを請求する機能があります。

Cloud Control Plane は、Oracle Public Cloud で使用されているものと同じです。このためお客様は、パブリック・クラウドと自社の拠点のどちらにおいても同じ UX と REST API を使用して同じ操作をすることが可能です。

Cloud Control Plane の手順は、Data Infrastructure Cloud@Customer と Cloud Control Plane 間のセキュアな専用トンネルを経由して送信されます。インフラストラクチャ・サーバーで稼働している 2 つのコントロール・プレーン・プロキシ・サービス（CPS）VM は、セキュアなトンネル・エンドポイントをホストし、インフラストラクチャへアクセスするためのゲートウェイとして機能します。また、これらは、クラウドの自動化を編成し、テレメトリ・メッセージを集約して Oracle Support にルーティングし、ソフトウェアのイメージおよびアップデートをホストするコンポーネントをホスト

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

します。Cloud Control Plane と Data Infrastructure Cloud@Customer システム間の接続で割込みが発生しても、データベースとアプリケーション VM の可用性には影響しません。

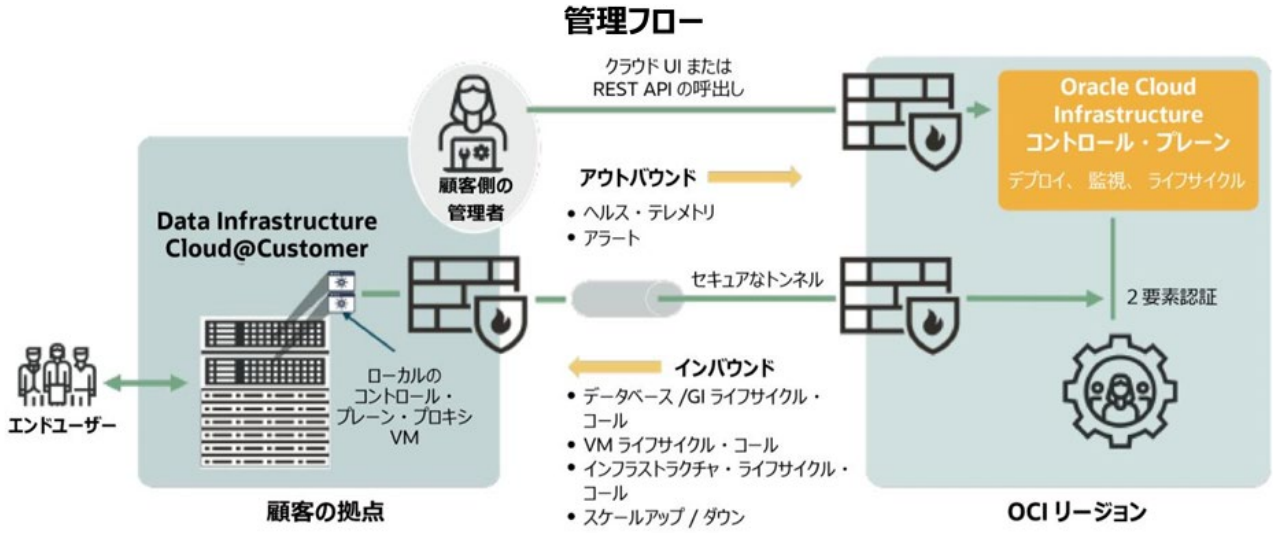


図 1：*Data Infrastructure Cloud@Customer* の管理フロー

エンタープライズ・クラスのセキュリティ

Oracle Database のサービスとインフラストラクチャは、世界中のオラクルと業界のセキュリティ専門家による精査と、主要なセキュリティ・テクノロジーを使用した検証の恩恵を受けています。Base Database Cloud@Customer では、お客様の拠点の物理的な保護が提供され、インフラストラクチャ、ネットワーク、および Oracle Database にデプロイされた包括的なセキュリティ対策が敷かれています。セキュリティ機能により、お客様のデータ・アクセスと Oracle Cloud Operations とが分離されるため、システムに出入りするデータおよびシステム上に常駐するデータが保護され、システムへのアクセスが認証され、システムで実行されるオラクル提供のソフトウェアが検証されます。Oracle Cloud の自動化は、すべてのデータベースにおいてデータ暗号化を行い、パスワードを強力なものにすることでセキュリティを強化します。そのため、お客様はオラクルが提供する最新のセキュリティ更新によって迅速かつ簡単にデータベースを最新の状態に保つことができます。

インフラストラクチャ・セキュリティは、システムの構成要素である物理サーバーおよびコンポーネントを保護します。お客様は、Oracle AI Database のデータを全面的に管理し、そのデータにアクセスする明示的な権利を持つユーザーのみがアクセスできるようにすることが可能です。Oracle Cloud Operations は、インフラストラクチャを管理する際にお客様のデータにはアクセスしません。
インフラストラクチャのセキュリティ機能には、次が含まれます。

- コンポーネントを提供するベンダーからのほとんどのハードウェア・コンポーネント上のベンダー署名済みファームウェア
- お客様のデータと Oracle Cloud Operations の間にセキュアな独立性を確保する仮想マシン

ネットワーク・セキュリティは、独立したネットワークを使用して実装されており、各ネットワークには重要なデータ処理タスクを保護するための追加のセキュリティ対策が備わっています。ネットワーク・セキュリティ機能には次のものがあります。

- 内部ネットワーク：セキュアな相互接続により、ストレージと Oracle RAC ネットワーク・トラフィックを分離し、保護
- お客様のクライアント・ネットワーク：Oracle Net Encryption により、データベースへのアプリケーション・トラフィックを保護
- お客様のバックアップ・ネットワーク：Oracle Net Encryption により、バックアップ、データのロード、Oracle Data Guard を使った災害対策など、高帯域幅のユースケース用のトラフィックを保護
- データベースとアプリケーション VM に直接マッピングされる VLAN のお客様による管理

プラットフォーム・セキュリティでは仮想マシンの分離を利用します。オペレーティング・システムには次のものがあります。

- Oracle Database の実行に必要なパッケージのみがインストールされて有効化されるようにする最小限の Linux ディストリビューション
- 攻撃対象領域を最小化する、最小限のオープン・ポートおよび実行中のサービス
- アクセスおよび変更を追跡する包括的なロギングと監査

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

お客様はトークン・ベースの SSH アクセスを使用し、仮想マシンへの完全な root アクセス権限を有します。さらに、ソフトウェア・エージェントのインストール、iptables ファイアウォールの構成、LDAP 認証など、既存のセキュリティ・ベスト・プラクティスを実装するツールを追加できます。

Oracle AI Database のすべてのエンタープライズ・セキュリティ機能もサポートされます。TDE 暗号化キーは、お客様のデータベース VM の Oracle ウォレットにパスワードで保護されて保存されるか、または Oracle Key Vault などの外部鍵ストアに保存されます。

Oracle Cloud Operations

Oracle Cloud Operations は、インフラストラクチャ・コンポーネントの管理、監視、保守を行います。

管理対象のコンポーネントは次のとおりです。

- 物理サーバーおよびストレージ・シェルフ
- 配電ユニット（PDU）
- 管理ネットワーク
- Oracle KVM（ハイパーバイザ）
- コントロール・プレーン・プロキシ仮想マシン
- データ・インフラストラクチャ・システム・ソフトウェアおよびすべてのファームウェア

監視対象のアクティビティは次のとおりです。

- Data Infrastructure Cloud@Customer レイヤー・インシデントの監視、管理、および根本原因分析
- しきい値のパフォーマンス分析

保守作業の内容は次のとおりです。

- ハイパーバイザ内のバグおよびセキュリティ問題の修正
- システム・ソフトウェアの更新およびアップグレード
- ストレージやネットワーク・コンポーネントを含む、ハードウェア・コンポーネントに対するファームウェアの更新およびアップグレード
- 必要に応じたソフトウェアおよびファームウェアの更新のための、インフラストラクチャの事前予防的アップグレード

クラウド・サブスクリプションの概要

インフラストラクチャのサブスクリプション

Data Infrastructure Cloud@Customer は、最低 4 年間の契約期間が必要なインフラストラクチャ・サブスクリプション（オプションで 1 年間の延長が可能）で利用できます。お客様は、ストレージ容量をカスタマイズできる固定サーバー構成をサブスクライブすることにより、データベースのサイズ要件に合わせてハードウェア・インフラストラクチャを適切にサイジングできます。

選択した構成のすべてのディスク/フラッシュ、IOPS、メモリはサブスクリプション料金に含まれます。ネットワーク通信については請求されません。表 1 に、詳細な仕様を示します。

データベース・ライセンス・サブスクリプション

Oracle AI Database のライセンスは、次の 2 つのデータベース・ソフトウェア・サブスクリプション・モデルで提供されます。

- ライセンス込み
- Bring Your Own License（BYOL）

データベース・ソフトウェアのライセンスは、データベース VM クラスタに割り当てられている ECPU がベースとなります。お客様はオンラインで ECPU をスケーリングでき、必要な処理能力に対してのみデータベース・ライセンス料を支払います。

ライセンス込み

このサブスクリプション・モデルでは、4 つのオプション層から選択することで Oracle AI Database Standard Edition および Enterprise Edition のすべての機能にアクセスできます。これは、Oracle AI Database の既存のライセンスがないお客様、または現在保持するライセンス・エンタイトルメントに含まれない機能へのアクセスを探しているお客様にとって理想的です。

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

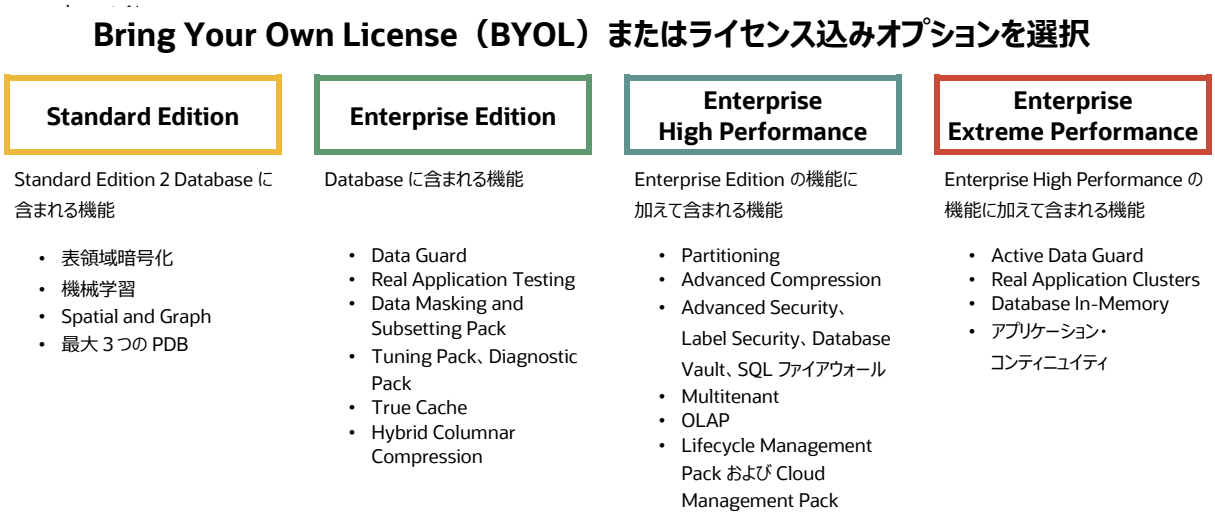


図 2：*Oracle AI Database* のライセンス込みのクラウド・エディション

Bring Your Own License（BYOL）

Bring Your Own License（BYOL）は、クラウドへ移行する際のコストを最小限に抑える目的で設計されています。BYOL モデルでは、既存の Oracle AI Database ライセンスとデータベース・オプション・ライセンスをデプロイできます。このサブスクリプション・モデルは、すでにオンプレミスの Oracle AI Database のライセンス・エンタイトルメントをお持ちのお客様にとって理想的です。

アプリケーション VM のサブスクリプション

お客様は、割り当てられた OCPU の数に基づいてアプリケーション VM をサブスクライブします。これにより、ワークロード要件に合うように、クラウド自動化を使用してオンラインでプロビジョニングとスケーリングを実行できます。各アプリケーション VM には、OCPU あたり最大 8 GB のメモリが含まれます。

Oracle Zero Downtime Migration

既存の Oracle データベースとの完全な互換性により、Base Database Cloud@Customer への移行はシンプルになり、リスクが軽減されます。オラクルは、データベース・ワークロードの移行では、Zero Downtime Migration（ZDM）をベスト・プラクティスとして推奨しています。Oracle ZDM により、オンラインでの移行、そして Linux x86、AIX、Solaris といったプラットフォームからの移行が簡単になります。Oracle Cloud へのデータベースの移行の詳細については、https://www.oracle.com/jp/database/cloud-migration/を参照してください。

結論：IT を変革し、ビジネスの可能性を解放

Base Database Cloud@Customer は、プライベート AI、データ、アプリケーションのためのシンプルで統合されたハイブリッド・クラウドをお客様の拠点で提供します。オンラインでの ECPU スケーリングと柔軟なストレージ容量により、従量課金制のデータベース・ライセンスが可能になると同時に、お客様はワークロード要件に合わせてストレージ・インフラストラクチャ・リソースを適切にサイジングできます。これにより、オンプレミスのクラウド導入におけるエントリ・ポイントのコストが軽減されます。オラクルが管理するインフラストラクチャと一般的なライフサイクル・タスクの強力な組込みの自動化により、システム管理とデータベース管理が簡素化されます。同時に、データベース、アプリケーション、AI 機能のサポートによって、1 つのシステム上に完全な環境をデプロイできるため、ハードウェア使用率が最大化され、インフラストラクチャ・コストが削減されます。

データ・レジデンシーの法律、業界規制、企業方針、ネットワーク接続、アプリケーション要件に対し、一元化されたデータセンター内の中核となるデータベース環境と、部門、支店、リモート・サイトのローカライズされたデプロイメントとで対応できるようになりました。ここでは、お客様はデータの完全な物理的制御を維持できます。データベースをオンプレミスで維持する必要がある組織は、運用のシンプルさ、セキュリティ、クラウドの経済性の恩恵をあらゆる場所で受けることができます。

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

企業で実証済みの Oracle AI Database 機能により、生産性が最大化し、リスクが軽減し、価値実現までの時間が短縮されます。組織は、SQL 互換性、パフォーマンス、可用性、トランザクションの整合性、既存のデータ・モデルのサポートを低下させることなく、クラウドの運用を採用できます。既存のオンプレミス・アプリケーションは変更を加えることなしに実行し続けるため、クラウドへの移行が簡素化され、ハイブリッド・クラウド戦略が可能になります。お客様は既存の Oracle AI Database ソフトウェア・ライセンスを使用することもでき、それによって以前のソフトウェア投資を保護できます。

オラクルは、パブリック・クラウドと Oracle Data Infrastructure Cloud@Customer の両方に Base Database サービスを独自に提供するため、組織は一貫性のあるハイブリッド・クラウドを利用してプライベートな自社拠点で Oracle データベースを最新化できます。

詳しくは、www.oracle.com/database/base-database-service/を参照してください。

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

ORACLE

表 1：Data Infrastructure Cloud@Customer X11：技術仕様

サービス項目	仕様			
システムあたりのサーバー数	2			
システムあたりのストレージ・シェルフ数	1			
システムあたりの使用可能なコア総数	120			
システムあたりの *ECPU* 総数	480			
VM に使用可能な総メモリ（*GB*）	1,320			
データベース *VM* あたりの最小 *ECPU* 数	4			
データベース *VM* あたりの最小メモリ容量（*GB*）	11			
アプリケーション *VM* あたりの最小 *OCPU* 数	1			
アプリケーション *VM* あたりの最小メモリ容量（*GB*）	8			
アプリケーション *VM* の *OCPU* あたりの最大メモリ容量（*GB*）	8			
サーバーあたりの *VM* の最大数	8			
システムあたりの最大 *VM* クラスタ数	12			
ネットワーク接続 [1]	サーバーあたりのクライアント・ネットワーク・ポートとバックアップ・ネットワーク・ポート • 4x 10/25 GbE（SFP28）または • 4 x 10 GbE（RJ45） サーバーあたりのコントロール・プレーン・ネットワーク・ポート • 2 x 10 GbE（RJ45）			
ソリッド・ステート・ドライブ（*SSD*）数 [2]	**6**	**12**	**18**	**24**
使用可能なストレージの総容量（*TB*） [3]	11.6	23.4	35.3	47.2
最大 *SQL* 読取り *IOPS* [4,7]	1,100,000	測定なし		1,500,000
最大 *SQL* 書込み *IOPS* [5,7]	900,000	測定なし		1,100,000
最大 *SQL* スキャン・スループット（*GB/秒*） [6,7]	11	測定なし		16
読取り待機時間の最小測定値（マイクロ秒）	150			

[1] クライアント・ネットワークおよびバックアップ・ネットワーク用としてデュアル・ポートの 10/25GbE SFP28 またはクアッド・ポートの 10GBase-T NIC を選択
[2] ベース・ストレージ・シェルフは 6 台のソリッド・ステート・ドライブ（SSD）で構成されます。SSD は 6 台単位で追加する必要があります。
[3] 使用可能なストレージ容量は、1 TB が 1,024 GB に相当するというオペレーティング・システムの規則に基づきます。この容量は、ASM の高冗長構成で必要とされる領域、ディスク障害からの回復、および Oracle インフラストラクチャの管理用の CPS VM に割り当てられる 250 GB を考慮した後の実際の容量です。
[4] SQL 実行時の 8K I/O リクエストに基づいています。
[5] SQL 実行時の 8K I/O リクエストに基づいています。書込み I/O は、冗長性を維持するために複数のストレージ I/O を発行する ASM ミラーリング後に測定しています。
[6] データベース圧縮をしない場合の SQL スキャン・スループット
[7] 両方のサーバーで稼働する VM クラスタで測定。各 VM には 64 ECPU と 256 GB のメモリがプロビジョニングされています。

表 2：Data Infrastructure Cloud@Customer X11：環境の仕様

システム・メトリック	測定
ラック・ユニット（*RU*）	8U（サーバーあたり 2U、ストレージ・シェルフあたり 4U）
高さ	サーバーあたり 86.9 mm（3.4 インチ）、ストレージ・シェルフあたり 175 mm（6.9 インチ）
幅	サーバーあたり 445.0 mm（17.5 インチ）、ストレージ・シェルフあたり 483 mm（19.0 インチ）
奥行き	サーバーあたり 775.0 mm（30.5 インチ）、ストレージ・シェルフあたり 630 mm（24.8 インチ）
重量	サーバーあたり 23.8 kg（52.5 ポンド）、ストレージ・シェルフあたり 38 kg（84 ポンド）
騒音（動作時）	8.9 ベル（サーバーあたり 8.5 ベル、ストレージ・シェルフあたり 8.1 ベル）
最大使用時のエアフロー [2]	合計 333 CFM（サーバーあたり 131 CFM、ストレージ・シェルフあたり 71 CFM）
標準使用時のエアフロー [2]	合計 234 CFM（サーバーあたり 92 CFM、ストレージ・シェルフあたり 50 CFM）
サーバーの電源	サーバーあたり 1,400 ワットのホットスワップ対応冗長電源 x 2 - 電圧（公称）200～240 VAC - 入力電流（最大）10.0 A（200～240 VAC 時） - 周波数（公称）50/60 Hz（47～63 Hz の範囲）
ストレージ・シェルフの電源	ストレージ・シェルフあたり 580 ワットのホットスワップ対応冗長電源 x 2 - 定格線間電圧：100～240VAC - 定格入力電流：100 VAC 8A および 240 VAC 3A
最大消費電力	サーバーあたり 827 W（0.84 kVA）、ストレージ・シェルフあたり 449 W（0.46 kVA）、合計 2.1 KW（2.14 kVA）

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates / 公開

標準消費電力 [1]	サーバーあたり 579 W（0.59 kVA）、ストレージ・シェルフあたり 314 W（0.32 kVA）、合計 1.47 KW（1.5 kVA）
最大使用時の冷却能力	サーバーあたり 2,822 BTU/時（2,977 kJ/時）、ストレージ・シェルフあたり 1,532 BTU/時（1,616 kJ/時）、合計 7,176 BTU/時
標準使用時の冷却能力	サーバーあたり 1,976 BTU/時（2,084 kJ/時）、ストレージ・シェルフあたり 1,072 BTU/時（1,131 kJ/時）、合計 5,024 BTU/時

- 動作時温度/湿度：5 °C～32 °C（41 °F～89.6 °F）、サーバーのフロント・ベゼルに向けられた産業用温度測定器で測定。10 %～90 %の相対湿度、結露なし
- 動作時高度：最大 3,048 m（高度 900 m 以上では 300 m 上昇するごとに最大周囲温度が 1 °C 低下）

[1] 標準消費電力は、アプリケーションの負荷によって変わります。
[2] エアフローは前面から背面へと流れる必要があります。

表 3：Data Infrastructure Cloud@Customer X11：準拠規格と認定規格

準拠規格 [1,2,3]	**安全性：**	UL/CSA 60950-1、EN 60950-1、IEC 60950-1 CB Scheme（各国の規定に準拠） UL/CSA 62368-1、EN 62368-1、IEC 62368-1 CB Scheme（各国の規定に準拠）
	排出量：	FCC CFR 47 Part 15、ICES-003、EN55032、KS C 9835、EN61000-3-11、EN61000-3-12
	イミュニティ：	EN55024、KS C 9835
認定規格 [2,3]	NRTL（北米）、CE（欧州連合）、International CB Scheme、HSE Exemption（インド）、BSMI（台湾）、KC（韓国）、RCM（オーストラリア）、VCCI（日本）、UKCA（イギリス）	
***EU* 指令** [3]	2014/35/EU 低電圧指令、2014/30/EU EMC 指令、2011/65/EU RoHS 指令、2012/19/EU WEEE 指令、2009/125/EC ErP 指令	

[1] 参照されている準拠規格と認定規格はすべて、本データ・シートの執筆時点での正式な最新版です。
[2] その他の国の準拠規格/認定規格が適用される場合もあります。
[3] 準拠規格や認定規格の遵守はコンポーネント・レベルで実現されている場合があります。

Connect with us

+1.800.ORACLE1 までご連絡いただくか、oracle.com をご覧ください。北米以外の地域では、oracle.com/contact で最寄りの営業所をご確認いただけます。

blogs.oracle.com　facebook.com/oracle　twitter.com/oracle

Copyright © 2026, Oracle and/or its affiliates.本文書は情報提供のみを目的として提供されており、ここに記載されている内容は予告なく変更されることがあります。本文書は、その内容に誤りがないことを保証するものではなく、また、口頭による明示的保証や法律による黙示的保証を含め、商品性ないし特定目的適合性に関する黙示的保証および条件などのいかなる保証および条件も提供するものではありません。オラクルは本文書に関するいかなる法的責任も明確に否認し、本文書によって直接的または間接的に確立される契約義務はないものとします。
本文書はオラクルの書面による許可を前もって得ることなく、いかなる目的のためにも、電子または印刷を含むいかなる形式や手段によっても再作成または送信することはできません。

Oracle、Java、MySQL および NetSuite は、Oracle およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称はそれぞれの会社の商標です。